

NEPAL...

「小さな」村に学ぶ「大きな」未来

木村良己

(高等学校教諭)

(一) はじめに

一九九九年夏、三年半ぶりにネパールに「里帰り」してきた。七月二六日から八月六日までの十一泊十二日の旅。↓大津↓関空↓バンコク↓カトマンズ↓チャングリン↓チトワン↓ポカラを結ぶ「ナマステ・チャングリン・ツアー」がそれである。学生時代の一九八〇年、八一年、八二年と三回にわたって公衆衛生に関わるワークキャンプに参加して以来、私が二十年來関わりを持つ日本キリスト教団京都教区アジア宣教活動委員会主催のネパール・ワークキャンプ『二十年総括誌』編纂のための資料蒐集と、次期ワークキャンプ協同作業内容の確認、ネパールの村の人々と作ってきたトイレ、井戸の使用状況や村の開発状況を学ぶことが大きな旅の目的であった。

(2) ネパール・ワークキャンプとは？

一九六〇年代後半に始まった「全共闘運動」は当時の教育界の秩序を根底から揺さぶった。その波紋はキリスト教会にも波

及し、教会闘争として広がっていった。今もなお、その余韻は続いているとはいえ、一九七〇年代中頃までにはいわゆる「正常化」という形で落ち着きを見せ始め、教会から多くの青年たちが姿を消していった。

そんな最中、一九七八年五月二七日、関西セミナーハウスで予定されていた「宗教と奉仕活動」というセミナーの講演者の都合が急に悪くなり、たまたま宿泊しておられた岩村昇さん(日本キリスト教海外医療協力会↓JOCsネパール派遣ワーカ―/十八年間ネパールの無医村で医療活動に従事)に急遽講演をお願いするという不思議な出会いから、ネパール・ワークキャンプは始まった。

講演内容は、ネパールの厳しい自然と人間の共生の姿、アジアの医療に携わる現場のワーカ―からの鋭い問いかけであった。菩提樹の話。菩提樹は、水を与えて二十五年たつてようやく人々に潤いと安らぎを与えるような葉を繁らせるようになること、その生い茂った木のたもとが旅人に憩いを与える場所となり、そこに立ち寄る人のために水(ダルマコバニ)が備えら

れ、そんな場所で釈迦が悟りを開いたことなど、まさに菩提樹が植えられている場所こそは、人と人、人と霊が出会う所であった。又、岩村さんが派遣されたタンセンでの巡回医療の話Ⅱタンセンでの巡回医療を終えた帰路、道ばたに倒れていたおばあさんを背負って三日三晩歩いてくれた若者に、お礼としてお金を支払おうとしたところ、「サンガイ・ジウネ・コラギ（みんなで生きるために）」と言い残してお金を受け取らなかった若者の話（教科書にも取り上げられた）は、圧巻であった。

「京都の教会青年をネパールへ送ってください」との言葉に促されて、組織化が進められ、岩村昇さんが提唱する「チトワン地域総合開発計画」の元に、多くの青年たちが「遺書めいた文書」を下宿の机の上にしたためつつ、参加したのである。あれから二十年、チトワン地域でのトイレ作り・植樹・農作業、チヤングリン村での井戸掘りを通して、十六回のワークキャンプが派遣され、延べ九十三人の青年がアジアの息吹に触れた。ちっぽけだけれどもネパール民衆と手を取り合った協力関係は、幾多の試行錯誤を繰り返しつつ、着実に歩みを重ねてきた。

「教育とは人を育てることではなく、人が育つことであり、その成長を待つことである」、「生きるとは、与えられたいのちを分かち合うこと……小さくされている人々と共に」との夢を描き、理想を掲げ、希望を抱きつつ、形としての「トイレ」「井戸」を作りながら、「アジア」の諸課題と出会い、「アジア」から日本を見つめ、自分を見つめ、その体験を携えつつ「こだわり」を持って生きる多くの仲間たちが存在している。

（3）カトマンズにて

三年半ぶりのカトマンズ。標高一、四〇〇メートルの盆地に車、車、車……。そして、排気ガスによる大気汚染。初めて訪れた二十年前に見受けられた光景Ⅱ牛が堂々と道路の真ん中を歩き、人や自転車避け通る様子は今や陰を潜めていた。アスファルトで固められ、煉瓦を土台にした歩道橋をあちこちに建設中。歩道橋って日本でも便利なようで、昇り降りするのにしんどい思いをする人々がたくさんいるんだよね、と思い起こされる。

今回初めて目にしたのは、サッファア・テンプー（電気エネルギーギーで走る三輪車）という代物。充分な都市基盤が整わないまま急速な人口増加と近代化が進む大気汚染都市カトマンズ。サッファアとはクリーンを意味するネパール語らしい。日本からのODA援助による日本製バスが排気ガスをまき散らせて走っているのを見ながら、カトマンズ郊外に作られたニュー・バスターミナルを生かして、市内は電気エネルギーギーで走る車のみにしてはどうだろう、日本のODAもこういうところで有効に使われたらいいのに、と思ったりするのだが……。

故マザー・テレサが率いた愛の宣教師会Ⅱミッシヨナリーズ・オブ・チャリティが行っているパシユパティナート寺院内の高齢者、「しょうがい」者施設とともに、今回「マイティ・ネパール（MAITI NEPAL）」を訪ね、「ネパールのマザー・テレサ」と呼ばれるアヌラダ・コイララさんと出会った。彼女は、二十年間私立学校教員として働いた後、私財をはた

て、「マイティ・ネパール」をエネルギーギッシュに運営している。

最近ネパールでは、一年間に五、〇〇〇〇七、〇〇〇人の十代前半の少女が売春目的のためにインドへと売られ、深刻な問題となっている。TRAFFICKERと呼ばれる人身売買人が、いい仕事や結婚の話があると言っては騙し、性的搾取、肉体的暴力によって使い捨てにされて帰ってきた時には、破傷風、結核、HIVで苦しみ、命を奪われているという。パシユパティ地域周辺でも、ストリート・チルドレンやドラッグ、「子ども売春」が増加しつつあり、行き場のなくなった女性や子どもたちを保護し、自立させることを目的にこの活動は推し進められている。現在、インドとの国境沿いに作られた四つのトランジット・ホーム（一時的避難所）、様々な理由で集まった三カ月から十六歳の子どもたちが共同生活するマヤ・ガールズ・ホステル、社会復帰と自立のためのトレーニング・センター（トビネパール帽、セーター、カバンなど日常的な製品を作っている）、彼女たちが教育を受ける「テレサ・アカデミー」（マザー・テレサが亡くなったときに完成した学校なのでそう名付けられた）など、女性の自立のための職業訓練や収入向上プログラムの現場に触れ、「教育」は万能薬ではないが、非常に重要な鍵を握っているとの認識を、ここでも与えられた。

（４）チャングリーンにて

カトマンズから、バスで四時間。グルカ兵の名前で知られるゴルカ郡、そこから細い吊り橋を渡り、重い荷物を背負って歩くこと二時間。最近ようやく一部に電柱が立ちはじめたチャン

グリーン村がある。

一九九〇年、この村にスワップナクンジャ・ボーディングスクール（「夢の庭小学校」という小さな私立学校が生まれ、私たちの仲間である中島ファミリーを教育派遣ワーカーとして派遣した（中島淳さんは帰国後、滋賀県近江八幡市にある近江兄弟学園中高の聖書科教員をされている）。しかし、自給自足、現金収入のない村では教員の給料を支払うことが困難となり、僕らにとつての「夢の庭」は、二年という短い働きを終えた詳細は『ナマステ・チャングリーン：ヒマラヤのふもとの村で』中島ファミリーを支える「ゴバルの会」交流報告誌を参照）。以来、十年近くにわたり、チャングリーン村が緊急に必要としている「井戸掘り」を中心に関わりを持ってきた。乾期のどん詰まりには井戸が涸れ、多数の死者がでる。治るはずの病氣も治らない。とてつもなく大きな井戸ではないけれど、洗濯や飲料水に村の人々が共同で使え、井戸端会議が繰り広げられるようなクワ（水場）を、毎年一つずつ作ってきた。「日本円にしてたった三万円の水場」を作るために「航空運賃約十万円×派遣人数」をかける非合理的ワークキャンプ。でも単にカネを送るだけではない、形としての「井戸」を作りながら、大地に汗を流し、草の根の人々の生活に自分たちを適応させていく中で、「アジアの中の日本・自分自身」を問い直す共同労働交流が重ねられてきた。

今回、「①環境開発②教育③健康④生活の向上を目指して活動する現地NGO「DIYOGグループ（「ともしび」という意味）」とのミーティングで、「もう井戸は十分だ！」との返事。公衆衛



現地 NGO=Diyo とのミーティング風景。47人の村人が集まった。
後ろの建物は、元「夢の庭小学校」。

生に関わってきたワークキャンプとしてはちよつぱり淋しさを覚えたが、十年かかってクワ（水場）やイナール（ポンプ式井戸）が掘られ、乾期のどん詰まりでも人が死ななくても済むようになったのだとの言葉に安堵。協議の末、せめて自転車を通れるような道の補修、ヘルス・ポストの建設、パイプラインなどの提案がなされ、あまりに大きなプロジェクトにしばらくたじろぎつつも、「等身大の協力・相手のニーズに立った対等な関係・形としてのモニュメントではなく、心のモニュメントとしての青年育成プログラム」の原点に立ち返りつつ、しばらくはこの村の開発プログラムに携わることを確認しあつた。

（5）チトワンにて

遡ること五十年近くなる第二次世界大戦後、一面ジャングルであつたネパール南部、インド国境沿いのチトワン地域に、アメリカの援助でジャングルが切り開かれ、山岳地帯に住む人々が移り住むようになった。最初は、自然のサイクルが働いて、豊かな穀倉地帯であつたが、化学肥料の導入によつて土地が痩せ、人口が増えて「排泄物」が自然のサイクルでは自然に帰らなくなつて伝染病の温床となり、森林伐採によつて水も涸れ始めてきた。今から二十年前、先に言及した岩村昇さんが提唱する「チトワン地域総合開発計画」の名の下に、東京の新宗連グループによる「農業改良普及」、愛媛の岩村昇博士協力会グループによる「植林」、我々京都グループによる「公衆衛生としてのトイレ作り」のワークキャンプは始まつた。

以来、十年間に渡つて、電気もガスも水道もトイレもないこ



「クワ」(共同水場)の上で！
左から2人目が筆者

の村の学校に公衆トイレを作った。当初、こんな大きなトイレ
本当にいいのか？との疑問から、素掘りの移動式トイレ
や、移動した後バナナを植えるバナナトイレットなど、工夫
を凝らしたが、あれから十五年後、前回訪問の折りには七〇パ
ーセントの家庭に簡単なトイレが掘られるようになり、今回は、
多くの煉瓦作りのトイレが模倣されつつ、改良型が作られてい
る様子に触れて、一安心。家畜の糞尿を攪拌してメタンガスを
発生させ台所に繋ぐゴースタルガス発生装置の普及と併せて、関
わり始めてから十五年目ようやく垣間見られた成果。当初、
「チトワン地域総合開発計画」で謳われた公衆トイレの糞尿を畑
に撒き、化学肥料に頼った農業からの改良普及や植林という自
然のサイクルの中での連鎖は未だ完成してはいない。菩提樹二
十五年同様、二十年、三十年のスパンで捉えなおすこと、「待つ
こと」の大切さに触れる。これも、ネパールの人々がよく言う
「ビスターライ！ビスターライ！（ゆっくり！ゆっくり！）」な
のだろうか？

(6) おわりに

今回の旅は、一九八〇年代アジアの草の根の人々と繰り広げ
られた二十代の血気盛んなワークキャンプとはひと味違い、四
十代になった「かつての青年たち」の生き方の原点、足跡を辿
り、資料蒐集と二十一世紀への展望を切り開く旅であった。

村で味わった「食」と「水」に対する飢えと渇き。一日二食
のダル・バート(豆汁とご飯)を右手で食べるだけの簡素な食
事。一リットル入りのミネラルウォーターを計画的に、チビリ

チビリと大切に飲む。缶カラ一杯の水と石鹼とを持って木陰に行って左手で用を足す。後はフンコロガシの働きに委ね、自然のサイクルの中で生活している事を実感。当然、村ではゴミなど出ない。人間の残したモノは家畜の餌になり、すべて土に返っていく。何でもかんでもリサイクル!というイメージがわかりにくい、とにかく修繕修理。使い捨てとは訳が違う豊かさ。そして、ただひたすら歩く歩く!暑くなったら木陰で休み、涼しくなったら働く、こうした村のライフスタイルは二十年経っても変わっていない。

ようやく見つけた茶店で五ルピー(約八円)のチャーを飲むにはお釣りのないよう小銭を用意しなきゃ。百ルピー(約百六十円)札など持っていても、お釣りなんかあるわけなし、何の役にも立たないただの紙切れ同然。貨幣経済にどっぷり浸かったものには何とも言えない空しさ。

黙々と川原で石を砕いている人々を見て「一日中じゃあ重労働だなあ」とつぶやき、「何言ってるんだ。一生だよ」と言われて衝撃を受けた二十年前の光景は、道路工事ラッシュのためか、今もあちこちで見受けられた。

あの「夢の庭小学校」の跡地(と言っても閉鎖中は家畜小屋になっていた程度の広さなのだが)には、Children's Academy English Boarding School が新たな私立学校として運営されていた。公立学校への対抗上英語に力を注ぎ、授業も英語で行われ、カトマンズに出ても通用するというのが「売り」の英才教育であった。ネパール文化、ダンス、詩、絵画、体育などに力を入れていたかつての我らが「Swapnakunja

Boarding School「夢の庭小学校」!。シメツケの厳しいパンチャヤット時代に、反体制の村として、政治的にも村の開発にも様々な恩恵から遠ざけられてきたチャングリ村にとって、公立も私立も共に村の教育を担い、学校を中心に村ぐるみの夢を作り上げようとしていたのだが、「夢の庭小学校」は、本当に「夢の跡」になっていた。

今、この原稿を指先で操作しつつパソコンを打っている。指先一本で操作できる便利な日本社会に順応している者が、頭のとっぺんで六十度を超える太陽の直射日光を感じ、足の裏にまめを作り、汗を噴き出させて、体全体を使って生きる生活を取り戻させてもらった十一泊十二日の旅であった。

ネパール民衆と大地に汗を流しながら、生きていく上で大切なことを腹の底に刻み込んだかつての青年たちは、今後とも年齢に応じたちょっぴり軽めの「ナマステ・チャングリ・ツアー」を企画し続けることだろう。本当は毎年行きたいところなのだが、「村で一杯の水を我慢するように」ぐっとこらえながら、次回は五年後、「菩提樹二十五年」とも絡ませつつ、どう成長したのか見てみたいもの。人も木も協力も!

それまで、涸れることのない一人一人に与えられた「いのちの泉」を湧き出させながら。